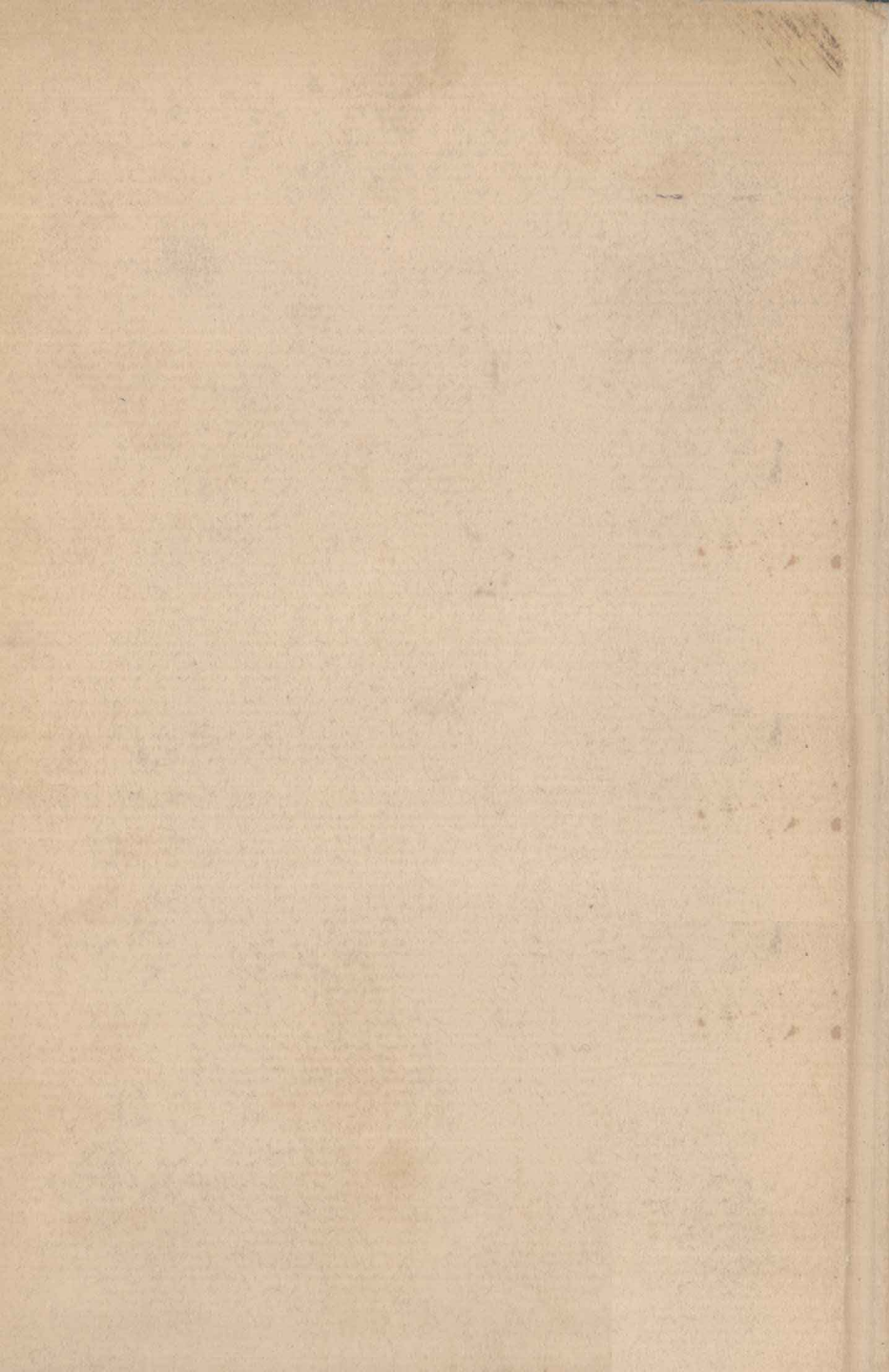
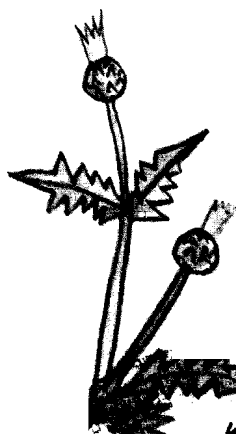




金太と兵隊

戦争従軍少年の記録

浅井計弥



講談社



NDC 914 19.4cm

金太と兵隊

定価 五二〇円

昭和46年3月18日

第1刷発行

著者

浅井計弥

発行者

野間省一

発行所

株式会社 講談社

東京都文京区音羽 2-12-21

郵便番号 112

電話東京 五三二二(大代表)

振替口座東京 三九三〇

印刷所

慶昌堂印刷株式会社

製本所

株式会社 国宝社

☆落丁本・乱丁本はおとりかえします

まえがき

この手記は、私の八歳から十七歳までのできごとを、昭和二十二年（十八歳）ごろ、追憶しながら書いたものである。純粹な少年の目で見た戦争、それを体験して来た赤裸々な姿である。

原文をそのまま生かしたので、読み辛い点が多いかもしれないが、あえて手を加えずにおいたのは、当時の私に忠実でありたいためであり、説明不足の点は別に注記した。

本来、この手記は、私一人だけの胸に秘め、年老いたとき、もう一度これを読み返して、少年時の自分の運命や悲しみを、そっと胸に抱いて、この世を去りたいと押し入れの奥深く隠しておいたものである。

悲しみや不幸は、私一人でたくさんだ、妻や子どもたちを悲しませたくない、知らせたくなかった。平和な現在のままでありたい。それだけが私の願いでもあった。

妻はいつの間にか、この手記を見つけ、ぜひ出版して、世のたくさんの人たちに読んでもらい、何か一つでもよい、人々の心の糧となり、平和がいかに大切かを訴えたい、と強く奨めた。私は自分の悲運で、他人を悲しませたりしてはいけないとしりぞけた。

しかし、周囲の人たちの暖かい励ましもあり、その利益は、すべて不幸な人々にさしあげ、自己の利益のためではないことを条件として、承諾した。

あなたの子どもたちに、このような悲しみを与えないよう、またさせられないよう、平和な世界をお築ください。

これがもっとも幸せなことであり、私の祈りでもあります。

（本文中の中国語は私が通訳してきたとおりの広東語を使用した）

一九七一年初春

浅井 計 弥

目次

まえがき

I 二つの山河……………七

神戸にて 7

さらば日本 17

香 港 21

澳門（マカオ） 26

おかあさんありがとう 30

新聞売り（その一） 34

新聞売り（その二） 39

灰色の空 45

II さまよえる母と子……………五三

知りあった花売り娘 52

死中に活を求めて（灣仔にて） 56

登山行野 62
秋だよ 68

Ⅲ 死神は離さない……………七四

死の罟の中を逃れて 74

「死なないで」 82

人間到處有青山 100

恐怖の街（昭和十五年） 107

Ⅳ 再びの離別……………二三

金太郎になる 113

母と別かれて 120

旅 出 125

母恋し（翠微にて） 129

Ⅴ 行けよ金太……………一五

土匪討伐 158

愛の新聞 174

性欲と兵隊、娼婦と私 187

香港攻略戦 199

トゲのある海 217

行く手はまだ遠い 224

VI 小さな墓標を胸に……………二三

チモール攻略戦 232

母はとぎす 238

ジャワへ 246

ラバウル（その一） 250

ラバウル（その二） 263

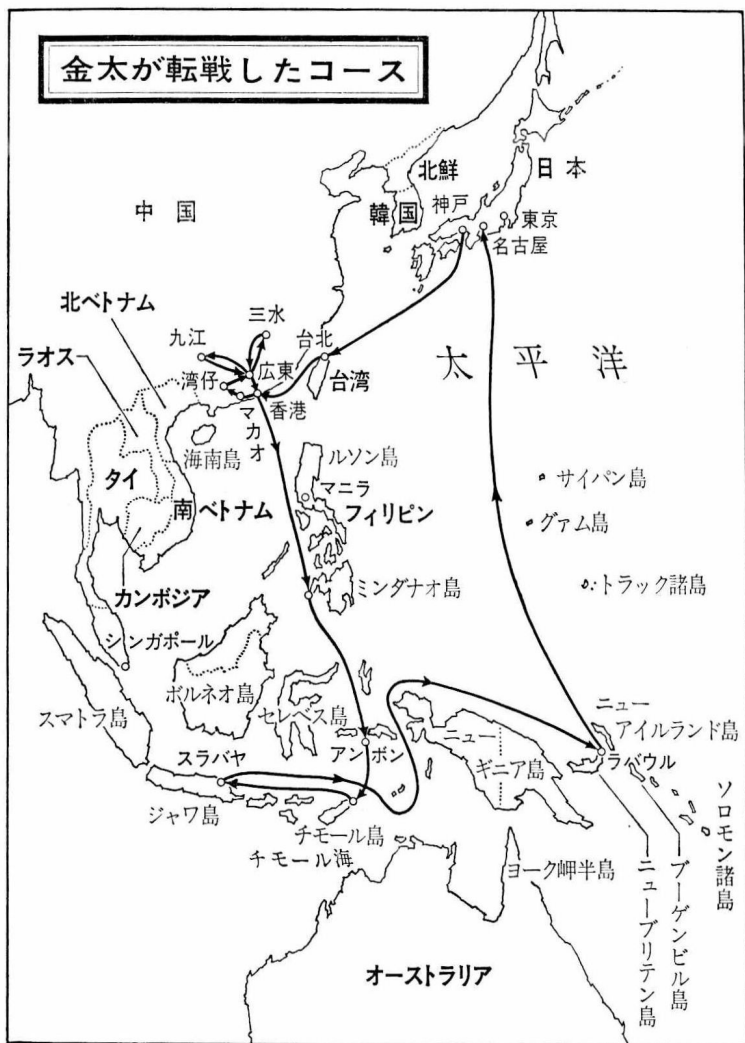
VII 守った約束……………二六〇

帰路 280

ああ無情 288

あとがき 298

金太が転戦したコース



I 二つの山河

神戸にて

懐かしい故郷

神戸市生田区中山手通り三ノ七十五は、私の生まれたところである。

忘れられぬ思い出の数々を、今もなお胸に抱きしめ、懐かしいかざりである。

大都会というより、むしろ小ぢんまりとした小都市の感じで、陸には、六甲山脈を背景にして、夜ともなれば山頂に神戸市のマークが輝いて美しい。

私は涼台に腰掛け、その山を見る。

「あの山の頂上まで、登ってみたいなあ」と、いつも思っていた。海にも近い。

神戸港といえ、他港に劣らぬ立派なもの、栈橋といい、設備といい、ほんとうにすばらしい波止場だ。

クレーンがいつも、忙しそうにガタガタと昇降して、船から陸に、陸からトロッコに、と運ば

れて大きな倉庫へと持って行く。

私は、友だち三、四人といっしょになってよく遊びに行った。

「海は、いいなあ」

「あんな大きな船に乗ってみたいなあ」

と、ため息をついて憧れたものであった。

広い海、青い空、まっ黒な煙が、もくもくと上がっていく。海の風に吹き散らされると、また、つぎからつぎへと、同じように繰り返していく。なんともいえない壮景だった。

海は、船からの油で汚れていても、ちょうど春の日ざしを受けて、五色に映え、異なった美しさが、漣さざなみとなって打ち寄せて来る。

私は、小石を拾い上げて、腕を力いっぱい振り回し、遠い海面に投げると、まん丸の輪が一つ二つ三つと続いて消えていく。

友だちも同じようにまねた。

こうして、海に憧れ、幼い日々が過ぎ去った。別段貧賤ひんせんを厭うこともなかった。

いつの日か、仲よし三人の友だちを集め、両親にはないしよで、米、鍋なべ、マッチ、罐詰等を用意して、六甲山の中腹あたりで、一晩星とにらめっこして泊まったこともあり、家じゅうの人々に心配かけたこともあったっけ……

神戸は、いい都だ。

懐かしい故郷だ。

あたかも海と、山との間に、細長い、街々が連結して、ちょうど汽車のようだった。

腕白小僧の思い出

く喧嘩けんかもした。

三の宮に学校をサボってよく遊びに行き、「丹下左膳たんげさぜん」や「自雷也じらいや」などの、チャンバラ活動写真を見ては満足した。それをまねて、他の子どもたちとよ

あるときは、友だちの頭を割って、そしらぬふりして家へ帰り、縁の下で寝てしまい、軒いびきをかいてばれたのには、さすが腕白小僧の私も、両親が恐ろしかった。

元町一丁目より六丁目までの本屋をあるだけ立ち寄って、「のらくろ」「福ちゃん」など好きな漫画をむざばり読んだ。しまいに本屋のおじさんに馴なじみ過ぎて、叱しかられてしまった。

それから、新開地へ行って、友だちと三人、合同出資で、わずか五銭しかなかったけれども、映画（その時分は、活動写真といわれた）館のおじさんに頼んで見せてもらった。

舞台の横手で一人のおじさんが、画面に合わせて、ペラペラとしゃべって、チャンバラになると音楽が鳴るのが何より痛快だった。

夢中で見ている間に、外はもうまっ暗、電車賃がないから、歩いて家へ帰ると、母に強く叱られた。父は、わりあい無口で、子どものことはいっさい母に任せまかせていたようで、ことに母の嫉しつけは、気強いものでした。箸はしでお碗わんに音でも立てようものなら、それこそ叱られてしまう。

べつに、百万長者でもないのに、ばあやさんを一人雇っていた。いや、きつと子どものために、母は一生懸命になってくれたにちがいない。

学校をサボるからといって、けっして欠席したことはない。かえって欠席し、無断で校外でサ

ボっている級友を連れ戻して来るくらいだった。

ヤンチャ坊主の私が、反面、素直さももっていたのか、級長にもたびたび推薦してくれた。

放課後、よくみなといっしょに兵隊ゴッコする。

私はけっして大將にはならなかった。もっぱら地雷の役をかってでて、敵の陣地を爆破するのが得意だった。これもたぶん、生まれつきの性格かもしれないが、父はよくこんなことをいつていた。

「お前は、どこかの貴人に拾われて、はじめて出世ができるのだ……」と。

「そうかなあ？」

父はたぶん子どものことをよく知っていたんだろう。女の子をよくいじめ、冬には、オーバーを隠して家へ帰さない、ほんとうにいたずら小僧だった。おかげで通知簿は、品行ですっかり点を引かれてしまう。

先生曰くには、「二番にはなれなくても、二番くらいには入れるのに、そのため三番になってしまった。まあ落第しなくてよかった」と。

何の課目が好きということもなく、何でも好き、学校も嫌いではなかった。ことに絵を描くことが性に合っているらしい。全神戸小学校図画展覧会が、大丸で催されたときは、たしか、静物画を出品した。先生も一生懸命になって、私の家まで来て指導してくれたことを思い出す。今懐かしいその先生は、どこにいられるだろう。あのときのヤンチャ坊主たちも、どうしていることだろう。たぶんそれぞれの仕事をし、運命に従って生き抜いているだろう。

たとえ不出世の私にしても、あつて語りたい。だけどこれは、一人思うのみ。

恩師よ、ありがとう！

須磨の浜辺で遊ぶ

二年生ともなれば、こんどは先生に作戦をしかける。叱られたり、壁に坐らせられたりすると、ちゃんとそのあとで先生におつりを返す。バナナの皮を腰掛けの脚に敷いて滑らせたり、または、五色のパチパチ玉（かんしゃく玉）を爆発させたりして、先生を困らせたりしたものだ。

先生も、よく家に来て両親にいい、おかげで母にすごく尻を叩かれたこともあった。

もっとすごいのは、二、三日間も、勘当され、飯ひと粒も喰わせてもらえなかったこともあった。私の母は、気が強くて心は優しい、母性愛に溢れた女だった。どんなに強く叱られても、私は母が好きだった。

父は、貿易（穀物類）商をしていた関係で、広くドイツ、中国、南洋などに渡って、種々体験して来たことから、いちおう何でも知っていた。もっとも金儲けは下手で、金銭的には淡泊であった。でも一家の生活は不自由ではなかった。

神戸の夏は暑い。しかし海に近く潮風が吹くのでさほどでもない。

学校の暑中休暇には、須磨の浜辺の近くに一軒の家を借り、ばあやさんをつけて、そこで勉強させてくれる。

勉強よりも、泳ぐほうが暇を取ってしまう。須磨の浜には、夏になるとおおぜいの人がやって来て、水に親しむ。色とりどりのパラソルが散らばり、ニュールックの海水着に、柔らかな肌を

隠し、中でも「背が低くて肉体美、おまけに足までが太い」と歌の文句にそっくりなもの、見事である。

私はほとんど一日中、その海辺で遊び、波に洗い清められた砂浜で、山を造ったり、トンネルを掘ったりして戯れた。

何の苦悩もない、平和そのものであった。やがて夏の太陽も西に傾き、沖の波もやや白い波頭を見せ始めると、みんなもう帰る。

私も肌に寒さを感じて、半裸のまま家へまっしぐらに走って帰る。

浜辺の夜は静かだ。

街のまん中に比べると、天国である。

夕涼みは、ほんとうに心地のよいもの。隣の子どもたちといっしょに花火をしたり、万古不易の姿であろう。オリオン星座を仰ぎ、その美しさに見とれたりした。

子どもの私たちには、色気も、しょっ気もない。純真無垢ではあるが、しかし男女が寄ればいささか「変」に思うのは本能らしい。

ふと、前の旅館の二階のバルコニーに、恋人か夫婦かしらないが、楽しそうに二つの影が語り合っているのを見た。確かに何か歌っているようだったが、何の歌か忘れた。

こうして、年々訪れた須磨の浜辺は、今でもかぎりなく懐かしく恋しい。

あまり大した家庭とはいえないが、今思うと、あのころはほんとうに幸福だった。

蘆溝橋畔の銃声が

やがて夏が過ぎ庭の紅葉も見事に秋の訪れを知らせるころ、私の運命は、共に吹きすさんでいく。

昭和十二年七月七日——中支の蘆溝橋畔にて、一発の銃声が轟きわたった。これがいわゆる「蘆溝橋事件」の発端であり、やがて日本の運命を大きく狂わせていく「日華事変」となった。しかしそのとき、私にはまさか、その銃声が私自身の運命を大きく狂わせることになるうとは夢にも思わなかった。

私は、八歳になっていた。まだ子どもだ。戦争は、おもしろいものと思っていた。勝つことしか考えていないからおもしろいのだろう。

敗けることなど少しも考えない。

両親から、よく戒められたものだ。

「いくら、正しいからと、先に手を出すなんていけない。たとえ相手が、敗けたからといって、けっしてお前は勝っていない……」と。

中秋の名月も、四海別なく、遍く分かち照らし、「四海みな兄弟なり」と母からよく聞かされたことを覚えている。

神戸の街々には、日の丸鉢巻を頭にくくりつけ、ハッピーにパンツ、地下足袋を履き、あたたかも魚屋のおじさんのような恰好で、腰にいくつかの鈴をぶら下げて、シャンシャンと景気よく、号外！ 号外！ と叫んで走って行く。

私は、何も知らない。ただ拾っては家に持ち帰り、父に見せる。

「ウム、疾風迅雷しつぷうじんらいだな、早くもどこか占領か」と一言。

それから何日かたって、隣の家隣の家の兄ちゃんが、おおぜいの人たちに送られて、〇〇君武運長久と書いた目の丸とノボリを立てて出征するという。

街角や、盛り場では、「大日本愛国婦人会」と書いたタスキを肩にかけたお婆さんたちが、細長い、白い布を手にして、往来の人々から、糸にボツを作って布に縫ぬいってもらっている。それは、千人針というものだそうだ。

私も、千分の一の力になればと、

「お婆さん、ぼくも一つ縫ってあげるよ」

「坊ちゃん、ありがとう！」

とお婆さんは、暗い笑いを浮かべて、礼をいった。きっと、お婆さんの息子むすこさんが、戦争に行かされるにちがいない。

私は急いで家に帰って、そのことを母に話すと、「そう、それはよく縫ってあげたね」といい、父も側そばから、

「みなさんのために、縫ってあげるんだよ」

「ウン」

私は素直に返事をした。

父は母に向かって、

「今度の戦争は、日露戦争や、満州事変とは違うようだね。タンク戦では時代遅れだ。空からの